高島屋史料館 TOKYO 企画展 Vol.3「デパート卓球」
セミナー 1

地域と都市における
アートの可能性について

北川フラム（アートディレクター／本展ディレクター）
［日時］2019 年 8 月 18 日 (日) 13:30 ～ 15:00
［会場］高島屋史料館 TOKYO 5 階旧貴賓室

「いま、行くべき場所」として世界が注目する瀬戸内。その立役者が、2010 年から 3 年に一度、開催されてきた「瀬戸内国際芸術祭」です。その総合ディレクターであり、第 3 回企画展監修を務めた北川フラム氏が、地域、そして日本の未来を拓く、アートの力を語ります。

北川フラム（きたがわふらむ）／アートディレクター
1946 年新潟県生まれ。東京藝術大学美術学部では仏教彫刻史を専攻。大学卒業後、東京藝術大学の学生・卒業生を中心に「ゆりあ・ぺむぺる工房」を発足させ、展覧会やコンサート、演劇の企画・制作に関わる。1982 年にアートフロントギャラリーを設立し、2000 年より開催されている「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」では総合ディレクターを務める他、瀬戸内国際芸術祭でも総合ディレクターを務めている。2016 年紫綬褒章、2018 年文化功労者。主な著書に、『美術は地域をひらく　大地の芸術祭 10 の思想』（現代企画室、2014 年 / アメリカ、台湾、中国、韓国で翻訳出版）、『ひらく美術　地域と人間のつながりを取り戻す』（ちくま新書、2015 年）などがある。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

芸術祭のはじまり

「瀬戸内国際芸術祭（以下、瀬戸芸）」は、2010（平成22）年の第1回以来、3年に1度開催され、今年で第4回を迎えました。始まりのきっかけは、2003（平成15）年の第2回「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ（以下、越後妻有）」を、当時ベネッセの会長だった福武總一郎さんが見に来られたことです。すでに香川の直島でアートサイトをされていて、それをさまざまな形で瀬戸内地域に展開していきたい、越後妻有のような試みだったらその可能性がありそうだと言われていました。その話を、福武さんが当時の香川県知事、真鍋武紀さんに持っていったのが2006（平成18）年。後から聞いた話ですが、知事も県庁内の目安箱の中に、越後妻有みたいなイベントを香川でもやれたら良いという若手職員からの投書があったのを目にしていたそうです。芸術祭の開催を少しずつ検討し、2008（平成20）年から正式に準備を始めました。

僕も2006（平成18）年から、約1年半にわたって、瀬戸内全域を見て回りました。備讃瀬戸（岡山・香川）のみならず、「瀬戸内海環境保全知事・市長会議 」という、1971（昭和46）年に発足した瀬戸内海の環境問題を扱う会議に参加している自治体、東は大阪、和歌山、西は大分まで、約10県。当時一番熱心だったのは広島県との連携を進めていた愛媛県だったのですが、結局開催することになったのは香川県だけでした。県内にある3つの主要な名所、金刀比羅宮、栗林公園、屋島でも観光客が減少し始めていたという背景があり、農林水産省出身で、連続3期、12年をかけてとにかく必死に県の借金返済をしてきた真鍋さんが、任期の最後に瀬戸芸を開催することになったのです。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

なぜ卓球、なぜデパートか

実は、その瀬戸内を見て回っていた時に、「二蝶」という高松で一番良い料亭を訪れたのですが、当時の女将さん（現在の大女将）が昔、卓球で全日本選手権を6、7連覇された方だと分かり、胸が騒ぎました。なぜかと言えば、僕がいままでで一番一生懸命やったのが、中学のころの卓球だったからです。しかもその女将さんは女木島に別荘を持っていて、卓球台があると聞いて、おおっ！となりました。それ以来、芸術祭で卓球をやるチャンスを窺っていたのですが、ついに今回の女木島の作品〈ピンポン・シー〉で実現したわけです。

さらにそれを日本橋高島屋に持ち込んだのが、この『デパート卓球』展。来月には、デザイナーの浅葉克己さんを迎えて卓球対決イベントを行いますが、彼も卓球が大好きなんです。つい最近まで中国の選手権でベスト4に入った名人から個人的に習っていたほどで、〈石の卓球台〉という作品をつくったこともあるそうです。

デパート卓球のほかに、『クルーズ卓球』と『アーケード卓球』という関連イベントもあります。瀬戸芸では前回から、クルーズ客船「にっぽん丸」で会場を2～3日かけて回るツアーを始めました。とにかく増える来場者数に対してホテルが足りないのが問題で、今回、2000室くらい客室が増えましたが、11月でも予約がとれない日があるくらいです。海上にホテルをつくれば問題解決の1つになるよねと始めました。約300室の客船で、前回は満室でした。今回は10月に開催しますが、その船に卓球台が出ます（笑）。

もう1つ、高松の中心市街地に丸亀町という有名なまちがあります。江戸時代、高松城築城の際に丸亀から来た商人たちがつくったまちなのですが、近年、珍しく再開発で成功したことでも知られ、そのアーケード商店街の中で卓球をやります。さらに最後に1つ、本番ということで、11月の瀬戸芸最終日に高松のホテル「花樹海」で行う打ち上げに卓球台をいっぱい持ち込みます。この『温泉卓球』で卓球シリーズは完結しようと思っています（笑）。

瀬戸内国際芸術祭2019『「島の中の小さなお店」プロジェクト』（女木島）の参加企画。
原倫太郎＋原游〈ピンポン・シー〉［提供：瀬戸内国際芸術祭実行委員会］

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

1. 高島屋史料館 TOKYO での連携企画、原倫太郎＋原游〈デパート卓球〉
2.『デパート卓球』展のポスター［提供：高島屋史料館 TOKYO］
3. にっぽん丸「瀬戸内国際芸術祭クルーズ」で開催される〈クルーズ卓球〉［提供：瀬戸内国際芸術祭実行委員会］
4. 高松丸亀町商店街で開催された〈アーケード卓球〉［提供：瀬戸内国際芸術祭実行委員会］

なぜ「デパート卓球」なのかと言えば、夏のこういう時季に、地方でやっている面白いものと都市をつなげるといいなと思っていたからです。

昨今、いわゆる現実的空間としての都市の可能性は、グローバル経済によって少し狭まって来ていて、とくに地方の中小都市のデパートが相当ひどい状態になっているということに対して、何かのつながりを考えたいという気持ちがありました。そんな時にこの企画のチャンスをいただいたわけです。

有り難いことに、いま、日本では芸術祭への関心が異常なほどに盛り上がっています。今年は「あいちトリエンナーレ 2019」での一件があって、表現の自由の問題が注目されましたが、日本における芸術祭は、外国の現代美術で言うところのトリエンナーレ／ビエンナーレに割と似ています。もちろん中身はだいぶ違いますが、表現の自由とともに「芸術祭って何だろう？」と言われ出して、いろいろな意味で関心が出て来ています。

芸術祭にはさまざまな可能性がありますが、僕が関わっている芸術祭は地域と非常に深い関わりをもっています。瀬戸芸には現代美術、いわゆるトリエンナーレ／ビエンナーレにつながる国際展という意識はもちろんあるのですが、それと

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

はちょっと違う意識の方が強い。たとえば「あいちトリエンナーレ」は毎回ディレクターもテーマも変わって、今回は「情の時代」。でも越後妻有はずっと変わらず「人間は自然に内包されている」というテーマで、瀬戸芸もずっと「海の復権」というテーマでまったく変わってない。いずれにも地域再生という重心があるからですが、実は越後妻有が始まった2000（平成12）年当時、地域再生と言うと相当馬鹿にされました。美術雑誌には取りあげてもらえず、現代美術というのはもっと何か高級で、生け花も焼き物もある「祭り」のようなものは王道ではないという感じでした。

現代美術に対する疑問

僕が上京して藝大に入ったのが1968（昭和43）年くらいですが、まず驚いたのが、現代美術の説明が「ウィトゲンシュタインによれば…」で始まったことです。もう絶望的な気分になりました。ウィトゲンシュタインなんて誰も分からない、面倒そうだというところから入るわけです。いまでも大きな流れは変わりませんが、美術とは本当にそういうことなのだろうか？　という疑問をずっと抱えていました。

美術とは、簡単に言えば、アルタミラやラスコーの洞窟壁画以来の、そこに生きている、やむにやまれない生活をしている人間たちの行為だったわけです。やむにやまれないのは、現代のアーティストも同じだと思いますが、いまの美術館やギャラリーが扱う美術とはちょっと違うんじゃないかと。30歳のアーティストの作品にオークションで3億円の値がつくというのは、グローバル経済における金融商品になっているだけで、それが一様に悪いわけではないのですが、本来の美術は、それとは違う必然性、必要性の中にあったのではないかということです。僕は、美術は地域を言及する手だてとして有効で、芸術祭を「祭り」として考えています。

いまの美術に関する疑問をもう1つ。僕は、建築家のミース・ファン・デル・ローエが唱えた「均質空間（ユニヴァーサル・スペース）」を、20世紀最大の思想であると思っています。安価な鉄とガラスで囲まれた、空調さえ入れれば住居にもレストランにもオフィスにもなる内部空間。こんな便利な空間は他にないし、人間というものを均質的、定量的に捉えることができる。美術もこの均質空間の考え方とほぼシンクロしていて、いま、美術作品は、白くて高い壁で囲われた「ホワイトキューブ」で見ることが多いですよね。ヨハネスブルクでも日本橋でも高松でも、1つの作品がどこでも同じように見えることが凄く重要。このホワイトキューブは20世紀の理想そのものだったわけで、基本的にいまの美術は、この均質空間という建築理念の中で展開しています。

しかし例えば、2018（平成30）年に森美術館で個展を開催したレアンドロ・エルリッヒというアーティストがいます。記録的な入場者数を記録し、話題になりましたが、彼は瀬戸芸や越後妻有でもおなじみの昔からの友人で、均質空間をどう超えるかをテーマにしています。今年は中国の北京で大展覧会をやるというので、そのカタログに論文を書きました。彼にはいくつかの要素があって、1つはアルゼンチンの人間だということ。詩人のホルヘ・ルイス・ボルヘスなんかにつ

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

ながる意識があります。また、僕の事務所はヒルサイドテラス（東京・代官山）にありますが、そこを設計したのは槇文彦さんという、今年91歳になる近代建築のエースみたいな人です。去年お話を伺った時も、槇さんにとっての一番の課題は近代建築をどう超えるかだけど、はっきり言って超えていると思わないし、みんな模索しているけど、誰もまだ超えられていないと言われていました。

近代建築とは、さまざまな世界につながる共通の土俵をどうつくるかということで、モジュール、つまり空間単位を足していき、部分が全体をつくるという考え方です。哲学者のサルトルなどが示したテーマを受けたこの考え方は凄く重要で、第2次世界大戦後には、それまでの「全体から個へ」に替わって、「部分から全体へ」という基本的な考え方が広がります。その「部分」という中に均質空間があり、槇さんはそこで格闘しているわけです。これは機会均等や民主主義と非常に軌を一にしていて、いま、それが問題にもなっています。つまり世界中が同じ空間になっている。東京もNYも北京も上海も同じ。それぞれの土地にあった固有の文化、生活が全部薄まっていってしまっている。プラスの面もあるかも知れませんが、失っている面が圧倒的に多いだろうと思っています。

地球上の人間をどう捉えるかというとき、例えば、人間がaからzまで26人いるとしたら、いままでの手法はaからzまでを足して26で割るというものです。そうすると真ん中がmかnになり、人間というのはmかnですよという言い方になる。人間を量的に測る以外にない。民主主義そのものが、そういう手立てでやらざるを得ないからなんです。これに対する異議申し立てが1970年代の学生運動だったわけで、藝大では、例えば、aとbの間、あるいはbとcの間にある世界をどう考えるのかを問題にしました。距離で考えた場合、aやbという点よりも、その間隔の方がずっと大きいはずです。藝大ではこういった問題提起で、全国の全学共闘会議ではもっと違う形で、近代合理主義の成立の仕方が問われました。

林達夫に学んだこと

瀬戸内から話がさらに逸れますが、僕が大学生の時に読んで驚いたのが、林達夫がルネサンスについて論じた『精神史――一つの方法序説』（岩波書店、1969年）です。今日は是非、林達夫を覚えて帰っていただきたい。30年以上前に亡くなられた評論家・編集者で、日本初の百科事典『世界大百科』（平凡社、1955-60年）の編集長を務めた、とにかく皆が優秀だと言うような、凄い人です。1896（明治29）年東京生まれの江戸っ子で、お父さんが外交官、弟さんは法制局長官。歌舞伎や能を毎日見ているような家で育ったわけですが、ある日「僕はそういう日本的なものを全部捨ててみたい」と言って西洋文化の中心であるルネサンスを勉強し始めた。学生時代、文芸誌に書いた「歌舞伎劇に関するある考察」（一高校友会雑誌、1918年）では、歌舞伎とはどういうものだということを書きながら、自分たちはそれを一度捨てて、西洋というものをちゃんと学ばなければいけないということを書いた。戦前は、岩波書店の総合誌『思想』の編集にも携わり、坂口安吾や太宰治、福田恆存など、小説家3人と評論家3人を世に送り出します。いわゆる「右か左か」という古い分け方ではない選び方をして、岩波の骨格をつくった方です。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

それで戦時下、ロクなことを書けない時、彼は一切文章を書かないのですが、1つだけ例外があります。それが「拉芬陀（ラベンダー）」という、自分の家には小さなお庭があって、そこにラベンダーの花が咲くよというだけの話。しかしこのラベンダーの話を枕に、坪内逍遥のシェイクスピアの翻訳について、連鎖のように話をしていくのが凄まじい。そこにある日本的文化、ナショナリズム、全体主義がいかに酷いか、そういう言葉を使わず、坪内逍遥以来の翻訳の歴史を通して書いているんです。また、新聞各社が書いている、いわゆる大本営発表的な記事について、9割は嘘、つまり行間を読む、眼光紙背に徹すべきとわかっているわけです。今度は戦後の1956（昭和31）年頃、どこかの新聞で、ソ連のウクライナあたりの小さな農園でストライキがあったという小さな記事を見つけます。当時は皆、ソ連の社会主義は結構希望であると思っていたわけですが、その記事を読んで、もしかしたら自分たちが聞かされていることと実情は違うのではないかと疑問をもち出す。もともと共産主義について勉強して、評論をいくつも発表し、『歴史の暮方』（筑摩書房、1946年）や『共産主義的人間』（月曜書房、1951年）という本も出していましたので、徹底的に調べる。それでいまソ連で進んでいるのは、マルクスやエンゲルス、あるいはイギリスの初期社会主義者、ロバート・オウエンなどが言ったような意味での共産主義、社会主義とはおよそ違うことであると、凄まじい批判をする。その後1960（昭和35）年前後に、ソ連の社会主義圏でさまざまな問題が起きましたが、世界で最初に日本から「こういう問題があるんだ」ということを指摘した人です。

先述の『精神史』における、レオナルド・ダ・ヴィンチの『聖アンナと聖母子』という絵画についての論考も凄まじい。その時まだイタリアに行ったことがなかったにも関わらず、あらゆる文献を使って全部調べる。ルネサンス当時の科学がどうだったのか、それをどう文化に活かしたのか。科学的成果を絵のディテールとしてちゃんと押さえ込んでいるんだと論じた文章には凄い迫力があって、読んだ当時、色々なことを考えました。林達夫は、何で日本が狭量でナショナリスティックで、世界文明とか人類史の中でものを考えられないようになったのかを、日本の中から考えようとしました。あえて中途半端に外国に行かない。ある意味、中国の農村の中で何が考えられるか、を考えようとした毛沢東の戦略と似ています。でもある時、新聞で「林達夫がイタリアに行った」という囲み記事を見つけたんです（笑）。僕はここが大好きなところでもあるのですが、あの林達夫が「やっぱりイタリアに行きたい」と思ったっていうのが良いでしょ（笑）。それで滞在中の様子を報じた記事の中で、「ヨーロッパはオリーブの国であることが分かった」というようなことを言っている。ちょうど春に行ったのか、一面に白い花が咲いていたのでしょう。50-60年間、ルネサンスを勉強して、そこに行き届いたというのが凄く良いなと思うんです。一度もお会いしたことはないですが、僕にとっての大先生なんです。

ただ日本の芸術に関しては、林達夫は先述の「歌舞伎劇に関するある考察」しか書いていません。大学で仏教彫刻史を専攻した僕にとって、その部分を補強してくれたのが、加藤周一の日本彫刻論です。彫刻史、美術史の先生ではないのに、仏像の宗教的なところを外して彫刻として書いた若い頃の論文があって、これが素晴らしくて、建築論を読んでいるような見事な裁断を下す。それを晩年になってテレビで解説したのが『日本その心とかたち』（NHK教育テレビ、1987-1988年）で、これは本になっています。日本の美術、あるいは文化の切り方が非常に面白い。長くなりましたが、これを前置きとして、今日の本題に話を戻したいと思います。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

本来の芸術とは

先ほど申し上げたように、美術というのは、とにかくその時、直感的に私たちが生きている上で問題に感じたことに対して常にやってきました。アルタミラ、ラスコーの時代では、死に物狂いで中型獣を獲って生きていた。マンモスやナウマン象ともなれば、鐘や太鼓で沼地に追い込んで動けないようにしながら 2-3 週間かけてやっつける。自分たちも相当被害を被りつつ、獲物を殺す時のあがきや苦闘がある。自分たちが生きる上でやらざるを得ないことであるが故に、祈りや鎮魂といったことを含めて、洞窟壁画があるわけです。アーティストは自分の不安や痛みといったことを直感的に何らかの形にします。それが非常に普遍的であったり、先見的であったりするので、美術は未だに人間にとって非常に懐かしい、あるいは素晴らしい友なのです。洞窟壁画にせよ外国の美術にせよ、それは私たちにとって時代を超えて残ってきた友、あるいは先祖みたいなものですね。いまも美術の役割はそうでありたいと思うのですが、先ほど申し上げたように、いまの美術は均質空間の中に入って、そこで争っている。僕はギャラリーや美術館でやっていることには敬意をもつし、素晴らしいと思います。ですが、やっぱりいまの大変な現実の中に出て来てほしいと思うわけです。例えるならば陸上競技。走り幅跳びでは、いま、8m20cm の記録よりも 20cm 伸びたぞ、ということを競技場で争っている。それはそれで良いのですが、走り幅跳びは本来、集落の中で、彼なら幅が 8m40cm ある川を超えられるぞ、ということが重要だったわけです。そして狩りの現場に出て行くと。いまの私たちは、それを陸上競技としてやっているだけです。

　では、いまの私たちの問題とは何かと言えば、一番は地球環境のどうしようもない劣化です。1997（平成 9）年の京都議定書の時、既に手遅れだと言われていましたが、大問題になっています。もう 1 つ、いまの経済状況の中で、資本主義が倫理性を失わざるを得なくなっているという大問題。資本主義では本来、労働に価値があるとされてきた。僕が東京に出て来た頃は 50 人の社員をクビにした社長は責任を取って辞めましたが、いまは 2 万人の社員をクビにした社長は偉いと言われている。これは資本主義そのものが持っていた倫理性を失っていると言えます。あるいは、先祖代々紡いできた固有の文化がそれぞれの地域から失わ

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

れていく。その他にも、もの凄く大きな格差社会など諸々ありますが、アーティストは、そういういまの社会的問題になんとか関わりたい、役に立ちたいと思っているはずです。アート自体はほとんど役に立たないし、政治的効用なんて全くないと思っています。しかし、例えば、田舎の過疎化が進み、地方というものが全部ダメになっているという現実に対して、自分たちがやっている美術を、何らかの形で役に立てられないかと考える。アーティスト自身はパリだったりNYに住んでいたりすると思いますが、友人なり親類縁者なりは田舎に住んでいたりする。「役に立つ」と言うのを現代美術は嫌いますが、そんなことじゃない。アーティストはいま、均質空間を出て、社会の中に出て行きたがっていると僕は思っていて、そういう場面をつくりたいと思っています。

日本社会が抱える問題

また、いまの日本が抱える大問題の1つに、嫌韓や反日といった、隣国関係の悪化があります。隣人とどう付き合うか、私たちはどこから来てどこへ行くのか。これは国民国家である以上、常に重要な問題です。今回の瀬戸芸では、先ほど紹介した女木島の〈ピンポン・シー〉と同じ会場に〈ウェディング・ショップ〉という香港の人たちの作品（お店）があります。香港はいま、経済人も含めて非常に大変な状況ですね。前回の越後妻有では〈香港ハウス〉を新築し、今年も展覧会をやっていますが、非常にデリケートな状況の中で、僕らも微妙なバランスをとりながらやっています。

日本というのは、地政学的に見ると、ユーラシア大陸における太平洋との緩衝です。これは決定的に私たちを規定している条件です。また『源氏物語』ひとつをとっても、世界で最も古い女性小説家の恋愛小説であったり、時空を一緒に描いた絵巻であったり、世界的に凄いことをやっている。客観的に見ても人類史のウィングを広げて来たと言える国で育ち、生活している私たち自身が、その良さを活かし、欠点をそれなりに矯(た)めていくということが重要だと思うわけです。

地域を元気にするには、そこに住んでいる人たちがプライドをもつことです。東京が5周先を走っているのでも、自分たちが5周遅れているのでもない。素晴らしいランナーだと自覚することです。時代によって表と裏は変わります。そのときにこの地域が果たして来た役割、あるいはこれから果たす役割を考えられる、それが地域の元気です。

瀬戸芸は先ほど申し上げた経緯で始まったわけですが、やる以上、ここがどういう場所なのかを考えなければいけません。この地域には約3万年前に人間がやって来たのですが、お母さんの小袋みたいな、非常に養分のある安定した海のおかげで、上手く定着します。その後は、個々の人たちが農業をやったり魚を捕ったりしながら、海を行き来する人から通行税をとったりする。これが海賊といわれている人たちですが、やがて平安時代中期、藤原純友の海軍となり乱を起こす。末期には源平合戦の場となり、西の国々と貿易をしていた平家が破れます。戦国時代には近畿の織田水軍と毛利水軍の争いがある。江戸時代になると北前船で賑わいます。大阪湾も瀬戸内海の一部で、大阪は江戸時代には「浪華八百八橋」と呼ばれたほど、海と密接につながる水都でした。1910-1920年代には、東京を

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

遥かに超える元気のあった「大大阪」時代を迎え、日本で最初のテーマパークが大阪にできたほどです。しかしそれ以降、大阪は陸地の方にばかり意識を向け、その結果、瀬戸内という穏やかで外国とつながる海の存在を失います。いまから110年くらい前、同じような状況を問題にして、もう一度水路を発展させながらアートによる地域づくりを考えたのがイタリアのヴェニスですね。世界一の文化都市だ、美しいまちだと言う人もいます。瀬戸内も、日本全体、世界の問題を考えながらやらないと、単純な観光という話になってしまう。それには市や県や国があっての話なのですが、それだけではダメで、同時に自助努力をしなければならないというのが瀬戸芸の出発点です。

1. 瀬戸内国際芸術祭2019『「島の中の小さなお店」プロジェクト』（女木島）の参加企画。リョン・カータイ＋赤い糸〈ウェディング・ショップ〉［提供：瀬戸内国際芸術祭実行委員会］
2. ユーラシア大陸から日本をみた「環日本海諸国図」［作図および転載元：富山県土木部］

海の復権

先述の通り、瀬戸芸は「海の復権」をテーマに掲げています。それを構成するキーワードは6つ。一番の目的はアート・建築です。当然これがベースになるわけですが、ホワイトキューブではアーティストが基軸になるのに対し、越後妻有や瀬戸芸で作品をつくるとき、当然その土地の特徴を考えざるを得ません。この作品がどういう場所に成立するか、あるいは作品の後ろにつながる風景はどういうものかということを考える。それが場の発見です。

瀬戸芸は最初、瀬戸内の東側の島々で始まりましたが、いまは西側にも会場を増やし、おかげさまでたくさんの方が来られています。とくに外国人の割合が非常に増えていて、前回はアジアからものすごい数の人が来られましたが、今年びっくり仰天したのが、世界的な旅行雑誌『NATIONAL GEOGRAPHIC TRAVELLER』の「2019年行くべきデスティネーション」で瀬戸内が1位として取り上げられたことです。しかも、ありがたいことに「瀬戸芸をやっている瀬戸内」という紹介でした。アートで場所の特色を明らかにすることが凄く重要なことだと思っていましたから、これはまさに狙い通りです。ナショナルジオグラフィックに続き、ニューヨークタイムズでも7位になりました。海外の高級旅行誌にはほとんど瀬戸芸が載っている状態です。この間JTBが出したデータでは、来場者に占める外国人の割合が、宇野港で27%、直島で46%。直島では瞬間的にはもう50%超えているんじゃないですかね。この傾向は、芸術祭の運営を手伝ってくれるサポーターを見てもよくわかります。今回の春会期は約3000人中1000人、つまり1/3強が外国から来られています。外国の方は会社を休んだり、中にはやめたりして、1週間や1ヶ月いてくれるので、

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

活動量は半分を超えている。なお、2016（平成28）年の第3回では、延べ約7000人ものサポーターが手伝ってくれました。これはキーワードの3つ目、「交流」につながります。さまざまな人たちが関わることで、その地域の人々が特徴を認識し、プライドとなる。地域を元気にしていくために必要なことです。同時に、できる限り普遍的でありたい、ここだけに通用することだけではダメだということで、「瀬戸内アジアフォーラム」という会議を始めました。前回、第1回の参加国は10カ国でしたが、今回はちょうど来週（8月21～24日）開催予定で、15の国と地域から38の自治体・企業・アート団体などが集まります。

6つ目のキーワードの「縁をつくる」も、さまざまな人たちと関わっていこうということですが、3年に1回、芸術祭が開催される約100日間以外の日々を考えるということです。この残りの1000日の方が100日を担保すると思って、大切にしています。越後妻有では会期中は400-500人、恒常的には100人以上の人たちが働いていて、瀬戸内ではその倍以上の人たちが働いている。通年で活動することが、地域にとって凄く重要なことです。

1. 瀬戸芸のテーマ「海の復権」を構成するキーワード
2. 瀬戸内国際芸術祭2019の会場
3. 第1回「瀬戸内アジアフォーラム2016」［写真：Miyawaki Shintaro］
すべて［提供：瀬戸内国際芸術祭実行委員会］

突然ですが、日本三景に共通していることが何か、わかりますか？いまから85年前、日本三景を元にして1934（昭和9）年にできたのが国立公園ですが、長崎の雲仙、鹿児島の霧島とともに第一号に指定されたのが、瀬戸内海国立公園です。手つかずの自然を守るため、世界で初めて制度化したアメリカの国立公園を参考にしたわけですが、アメリカが多くの国立公園を整備したのはニューディール政策の一環で、第1次世界大戦後の世界恐慌から脱却するための土木事業という意味も大きかった。

一方、日本でも第1次世界大戦後の大変な時、高橋是清などが頑張るのですが、実は、そこで昨今流行りの「インバウンド」という言葉が使われているんです。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

これには驚きましたが、いまの政権は昔のことを引っ張り出して来ていたわけです。しかし、日本における手つかずの大自然というと、北海道の大雪山とか日本アルプスとかになってどうも馴染まない。そこで日本三景を参考にして、国立公園法ができたわけです。日本三景は林羅山という江戸時代の有名な御用学者の息子、林春斎が『日本国事跡考』（1643年）の中で、松島・天橋立・厳島（宮島）を「三処奇観」であると記したのが始まりです。

この3つに共通していることが3つあるのですが、まずは、全部に「海」があります。これはもう遺伝子というしかありません。3万年から1万年くらい前にかけて、大陸から海を渡ってきた人たちの遺伝子です。2つ目は、全部「緑が濃い」こと。3番目は、全部に「寺社仏閣」があることです。かつて旅に出ると言えばお参りで、「物見遊山」と言っていましたよね。いまは、森ビルの最上階に美術館があるように、神社仏閣の代わりにアートがある。僕らもそういう意味では、神社仏閣の代わりに芸術祭をやっているようなものです。この3つは、私たちの基本的な美意識と言えると思います。

瀬戸内には海、越後妻有には濃い緑があります。とくに瀬戸内は、世界中にある夏の海の風景も、カボチャが入った瞬間に「瀬戸内」、あるいは「直島」となる（笑）。地域を代表するイメージになりました。最初から意図したものではなく、私たちが何か道しるべをと思っていたところに、アーティストがカボチャをつくりたいと言ったので、ここに〈南瓜〉があるのですが、いわゆる「インスタ映え」スポットになっていて、いまの時代を反映していています。越後妻有にも「清津峡渓谷トンネル」という大人気スポットがあります。ありふれた風景に対して光と陰、あるいは言葉を与えるのが、アートのいまの役割の1つです。ちょっと大げさに言えば、ありのままの自然も良いけれど、その作品があることで、直島や瀬戸内という土地の歴史がある意味、蘇るということです。地名というのは非常に重要ですよね。越後妻有では3.11の東日本大震災の翌日、3月12日の長野北部地震の時、辰ノ口という場所で雪崩が起きて電波塔が全滅しましたが、人的被害はなかった。辰ノ口というのは水を吐くということ。いまから1000年以上前に、ここは水が出る危ない場所だと地名に付けている。昔からの知恵が土地に残っているわけです。

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2018。マ・ヤンソン／MADアーキテクツ〈Tunnel of Light〉（清津峡渓谷トンネル）［写真：Nakamura Osamu ／提供：大地の芸術祭実行委員会］

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

持続可能な観光に向けて

2018（平成30）年の訪日外客数のデータをみると、一番多いのが香港からで、香港人の5人に1人が訪日している計算です。台湾人は6人に1人、韓国人はいまちょっと減って、9人に1人。以前は7人に1人でした。隣国と仲が悪いとか言っている場合ではないはずです。そして面白いのが、本当に縁がない国を除くと、実は、アメリカがほぼ最下位。だからアメリカ人は日本のことをほぼ知らないと思った方が良い。こういうことが凄く重要で、芸術祭をやるときに考えなければいけないことです。

こうした状況の中で、2015（平成27）年、国連総会で採択されたSDGs（持続可能な開発目標）があります。いまはとにかく、さまざまなところで排他的なナショナリズムの勢いが極めて強い。第1次、第2次世界大戦後に苦労して、曲がりなりにも打ち立てたユートピアが崩壊している。これから何を共通項としていけば良いのかが、SDGsという形で出たわけです。2017（平成29）年は「開発のための持続可能な観光の国際年」でした。「持続可能な観光」とは、名所旧跡に行くことではなく、その地域の人や自然と触れ合い、世界中にあるさまざまな文化を知ることです。僕らは越後妻有を始めた20年前から、地球環境や地域が失われていくことの問題の大きさや、第1次産業、食が重要だということをずっと言ってきました。今回の「瀬戸内アジアフォーラム」には、国連の世界観光機関の責任者が来て基調講演をしてくれます。僕らのやってきたことが、それなりに伝わっているのだと思います。

アートというのは本当に手間がかかります。お金もかかるし人手もかかる。言ってみれば赤ちゃんのようなものじゃないかと。子育てというのは大変なわけです。お母さんは子どもが憎いわけじゃないけど、最近は幼児虐待のニュースも多い。そういうとき「まぁ休んでおいて、うちらが面倒見てるから」とやって来る、近所のおじいちゃんとか、向かいのおばさんみたいな役割がいま、重要になっています。こういう状況の日本で生きているとき、何故アートかと言えば、「地域の発見」という面があるからです。赤ちゃんみたいに面倒くさい、「役に立たないアート」なるものが、何かちょっと面白い。それ故に、いろんな人たちが関わりやすい、手伝いやすいものになってきている。これがアートのもつ極めて重要な力ではないかということが、長年芸術祭をやってきて分かったことです。文科省も「芸術祭が日本の文化を引っ張っていく」「食こそ文化のひとつだ」ということを言い出しました。これも凄く重要な話です。

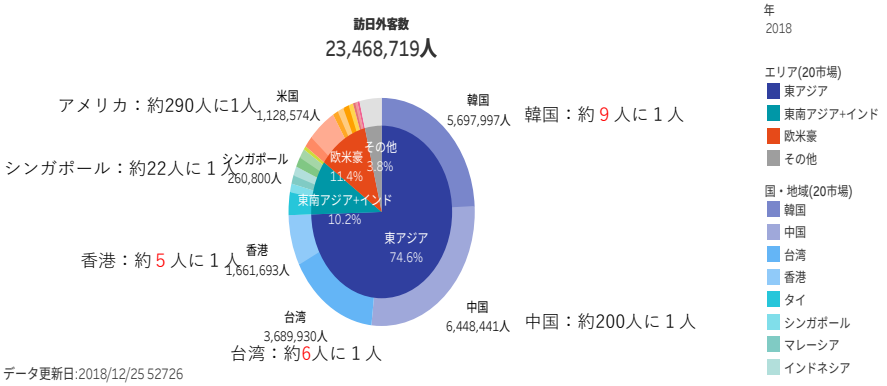
最後、繰り返しになりますが、ホモサピエンスがどうやって日本にやって来たのかを考えるべきだと思います。日本が世界のどういう場所にあって、どういう意味を持っているのか。日本の国土面積は世界で61番目ですが、海岸線の外周距離は世界で6番目だということをもっともっと、ちゃんと考えるべきです。私たちは世界とつながることによって生きている、それは良くも悪くもなく、日本人の特色であるということです。

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.

1

訪日外客数　各国・地域別の内訳

2018年 各国・地域別の内訳



2

3

国連「開発のための持続可能な観光の国際年」2017
(International Year of Sustainable Tourism for Development)

背景
・World Tourism Organization (UNWTO)の Taleb Rifai事務局長（当時・ヨルダン出身）や UNESCOなどが中心となり制定（2015年）

目的
・開発途上国の経済成長を支える観光の役割に対する認識を広めていく
・旅先での異文化交流が相互理解を深め、多様性と平和をもたらす
・自然との触れ合いを通じて、環境に対する問題意識を高め、地球規模の課題について考える機会を得る

1. 2018 年の訪日外客数各国・地域別の内訳［出典：JNTO 日本の観光統計データ（https://statistics.jnto.go.jp/graph/#graph--breakdown--by--country）をもとに作成］
2. 国連が提唱する SDGs、17 の目標［引用：国連開発計画（UNDP）（https://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sustainable-development-goals.html）］
3. 国連「開発のための持続可能な観光の国際年」の概要［引用：国連開発計画（UNDP）（https://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sustainable-development-goals.html）］

Copyright © TAKASHIMAYA CO.,LTD. All Rights Reserved.